

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Changes in the relationship between inferential modal adverbs and co-occurrence forms in Modern Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小池, 康, KOIKE, Yasushi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002091

副詞の共起形式に関する史的変遷

——推量のモダリティ副詞を中心に——

小池 康

(筑波大学)

キーワード

推量のモダリティ副詞, 共起形式, モダリティ, 共起モデル

要 旨

本稿は、日本語の言語変化の観点より、「おそらく」「たぶん」「きっと」「さぞ」「さだめし」などの推量のモダリティ副詞とそれらと共起する形式との関係が、明治期以降どのように移り変わっていったのかを、記述的考察を中心に解明しようとするものである。

まず副詞自体の出現率の変遷については、「さぞ」と「さだめし」は明治前期（形成期）生まれの作家に、「おそらく」「たぶん」は昭和期（転成期）生まれの作家に、そして「きっと」は通時代的に使用率が高くなっていることがわかった。また、地の文で多く用いられる副詞には「おそらく」「たぶん」が、会話文で多く用いられる副詞としては「きっと」があったが、時期の変遷に伴って、出現する文にも変動が見られた。

副詞と共起形式との関係においては、変遷のプロセスとして大きく三つのタイプを抽出することができた。すなわち、「おそらく」「たぶん」などの〈共起形式累加型〉、「きっと」の〈共起形式共立型〉、「さぞ」「さだめし」の〈共起形式呼応型〉である。そして、その共起のタイプに応じた仮説的な「共起モデル」を提示し、相互間の関連性について論じた。

1. はじめに

本稿は、いわゆるモダリティ副詞およびそれと共起する形式（以下、「共起形式」と呼ぶ）が史的にどのように移り変わっていったのかを記述し、分析・考察しようとするものである。具体的には、推量の意味を持つと考えられる「おそらく」や「きっと」などの副詞を対象に、明治期以降、それらの副詞の共起形式にはどのような変遷があったのかを探っていく。

本研究は、明治期以降のいわゆる「現代日本語」¹がどのような変遷をたどってきたかというプロセスの解明およびそのモデル化を目指すものである²。本稿では、副詞と共起形式の関係を例として、大局的ながらそのプロセスおよびモデルを提示したいと考えている。

本稿の構成としては、まず対象とする副詞自体の明治期以降での出現傾向を確認し、さらに地の文や会話文などの違いによって副詞がどのように使い分けられていたかを見る。次に、副詞と共起形式とが、明治期以降現代に至るまでの史的な観点より、どのような変遷をたどったかを見ていく。

2. 対象副詞

本稿で対象とする副詞は、推量の意味を持ち、かつ主に（ダ）ロウやマイなどの推量を表わすモダリティ形式³と共起すると考えられる副詞である。

本稿における「推量」は、「ある事柄や命題（言表事態）の実現・成立・存在する可能性・蓋然性が100%ではないと、（漠然と）想像において認識・把握したもの」とする。これは、奥田(1984・85)、仁田(1991,2000)、宮崎(1992)、三宅(1995)などでの定義を参考にしたものである⁴。また「モダリティ」は、益岡(1991)、野田(1997)、仁田(2000)などを参考にして、「言表事態に対する話し手・語り手の主観的な判断・態度を表すカテゴリー」⁵と定義し、それが（多くは文末の助詞・助動詞として）具体的な形式として表出したもの⁶を「モダリティ形式」⁷と呼ぶことにする。なお、この「モダリティ形式」は「共起形式」と同義とし、以下両語を併用する。

対象副詞を選定するにあたり参考としたのは、島本編(1989)と織田(1967,1970)である。島本編(1989)は副詞用例辞典であり、これより推量のモダリティ形式と共起した用例が挙げられている副詞を選出した。また、織田(1967,1970)は、日本語使用者を対象にしたアンケート調査の結果を踏まえて、「きっと、たぶん、おおかたなどの実現の程度量（確信）表現用語」の語義の違いがどのように意識されているかを分析したものである。副詞間の語義の違いは、各副詞と共起する成分にも少なからず影響を与えているものと考えられることから、織田(1967,1970)での対象語を本稿での対象副詞の参考とした。そこで織田(1970)での対象語より、副詞自体が推量の意味を持ちうるもので、かつ推量のモダリティ形式と共起しうると考えられる副詞「きっと⁸・たぶん・おそらく⁹」の3語を選び、これに島本編(1989)より「さぞ¹⁰・さだめし¹¹」の2語を加えた計5語¹²を対象副詞とした¹³。本稿では、これらを「推量のモダリティ副詞」と呼ぶこととし、以下考察を進める。

3. 資料

研究の性格上、資料は発話資料・書記資料・アンケート資料など多岐に渡ったものとすべきであるが、本稿ではこのうちの書記資料を、なかでも小説を資料とする。しかし、一概に小説と言っても純文学や大衆文学などの種類があり、また大衆文学にも「時代・歴史小説」「家庭小説・通俗小説」「推理小説」「サイエンス・フィクション」などのさまざまなジャンルが含まれる（長谷川・武田1965）¹⁴。本稿では、庶民向けに書かれたとされる明治期以降の大衆文学を資料として、分析を試みることにする。

作品の選定は、柳田ほか(1961)、瀬沼(1965)、浅井(1978a,1978b)、尾崎(1978,1986)、浜田(1996)、鈴木(1997)などに挙げられている大衆文学作品を参考に、家庭小説・通俗小説・ユーモア小説・中間小説などを中心に選定した。また、特に第二次世界大戦後の小説に関しては、「大衆文学の領域ですぐれた作家を顕彰する」（サカイ1997:66）とされる直木賞受賞作品をはじめとして、長谷川・武田編(1977)、辻村(1981)、塩澤(1995)を参考に新聞小説やベストセラーといった作品も資料の対象に加えた。これらのジャンルの小説より資料を選定した理由としては、これらの小説が大衆の風俗を描いた大衆向けの娯楽小説であり¹⁵、その意味で大衆に認知されやすいような表現がより多用される傾向があると想定できるからである。そしてその点では、「芸術のため」の純文学や「時

代・歴史小説」等の他の大衆文学のジャンルよりも、作家の表現や文体等の比較においてクセのようなものが極端には出にくく、比較対照を行なう上で適していると思われたからである¹⁶。

以上を踏まえ、資料は基本的には作品の初版本とするが、入手できなかったものに関しては全集などを用いた。本稿で資料とした作品は51名の作家で63作品である（作品の詳細は論文末）。

分析にあたっては、便宜上、この51名の作家を松村(1998)で提唱された以下の「東京語の成立と発展」の五つの時期区分に従って、グループに分けて行なうこととした。

第一期 明治前期〔形成期〕明治の初年(1868)より明治十年代の終わり(1888)まで

第二期 明治後期〔確立期〕明治二十年代の初め(1889)から明治の末年(1912)まで

第三期 大正期〔完成期〕大正の初年(1912)から大正十二年(1923)九月の大震災まで

第四期 昭和前期〔第一転成期〕大正十二年の関東大震災後から昭和二十年(1945)八月の終戦まで

第五期 昭和後期〔第二転成期〕終戦後から今日まで

この区分に従って、作家の生年を振り分けた。しかし、第三期に生まれた作家は織田作之助のみであったため、これは第二期の「確立期」に含めた。そのため、結局、「形成期」「確立・完成期」「第一転成期」（以下、「転成一期」と呼ぶ）「第二転成期」（以下、「転成二期」と呼ぶ）の四つのグループとした。

作品別ではなく作家別にした理由は、すべての対象副詞がどの作家のどの作品にも出現するとは限らないことから、作家単位である程度まとめた数値を出し、それを分析した方が、傾向を把握するのがより明快になるのではないかと考えたためである¹⁷。

また、この時期区分を取り入れる理由としては、

1. この区分が、「明治の初年から今日に至るまで」の「東京における都市としての発展・変貌の様相と言語的事実の推移との関連上から」（松村1998:87）なされているという点で、歴史的事実と言語的事実の双方を踏まえた、客観性の強い区分であると考えられたため。
2. 鈴木(1986:750-751)に述べられているように、「従来、現代語におけることばの変遷を扱う場合、（中略）こうした時期区分と関連させて研究したものは、ほとんどなく、「それぞれの時期における言語的特徴が明らかになれば、前述の時期区分を手直しする必要があるか否かも、当然導き出されることになる」ことから、明治期以降の言語変化を研究する上でのひとつの尺度になると考えられたため。

などが挙げられる。

なお、作家の成育地別の違いについて、一言触れておく。

作家を成育地別に見た場合、日本各地（48名）もしくは旧満州・旧朝鮮（3名）であった。大まかではあるが、前者を東京（15名）・東日本（18名）・西日本（15名）と三つに分類¹⁸をして成育地別で各副詞の出現比率に差があるかどうか統計的検定（ χ^2 検定）を試みたところ¹⁹、有意差が見られた（ $\chi^2(6)=25.97, p<1\%$ ）。しかし、副詞と成育地の関連の強さを表わすクラメールのV係数（Cramer's V）²⁰は0.10であり、本稿で設定した四つのグループと副詞との関連を示すクラメールのV係数0.26よりも小さな値を示したため、本稿の分析では成育地の違いは考慮に入れないこ

ととした。

4. 対象副詞の分析

4.1. 全体の傾向

図1は、対象副詞の出現比率の変遷を表わしたものである。

図1 対象副詞の時期別出現傾向²¹

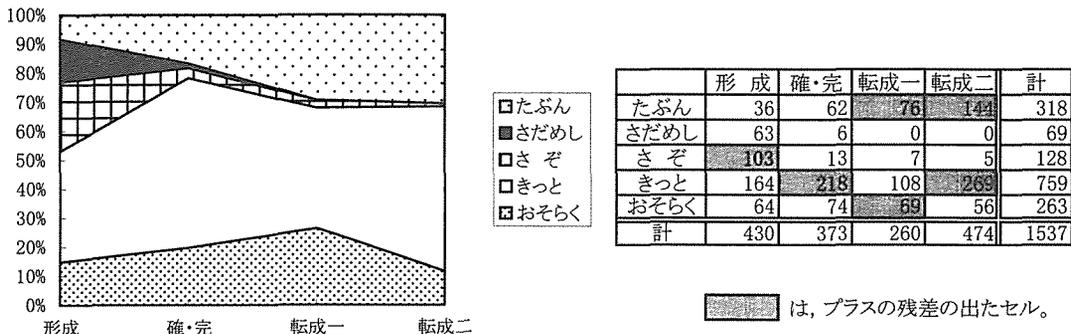


図1より、以下のような点が認められる²²。

1. 全体的には「きっと」の出現比率が、ほぼ半分近くを占める。
2. 形成期の作家では、「きっと」の他に、他の4語にも用例が見受けられたのに対し、時期が下るにしたがって「さだめし」や「さぞ」などの出現比率は減少傾向にある。
3. 「おそらく」は、転成一期生まれの作家までは年々出現比率が上昇していたが、転成二期になると減少している。
4. 「たぶん」は、時期を経るごとに出現比率が高くなっている。

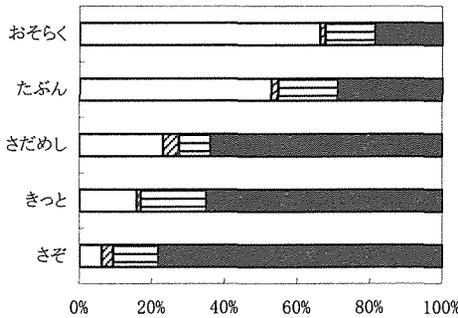
このように、推量のモダリティ副詞間の出現比率は史的に変遷しており、時代によって使用の度合いが高い副詞や、逆に使用されなくなっていった副詞があることがわかる。すなわち、「さぞ」や「さだめし」は、形成期（＝明治初期）生まれの作家には使用が認められるのに対して、確立・完成期（＝明治中期）以降に生まれた作家においては急激に使用比率が下がり、逆に「たぶん」や「おそらく」が増加している様相がうかがえるのである。

4.2. 地の文・描出文²³・会話文への出現傾向の違いによる分析

本節では、各対象副詞が地の文や会話文などによって、現われ方がどのように異なっているかを見る。図2は、各対象副詞の地の文・手紙文・描出文・会話文への出現比率を表わしたものである。

各副詞との関連について χ^2 検定を施した結果、地の文では「おそらく」と「たぶん」が、また会話文では「さぞ」と「きっと」が有意に多いという結果が出た（ $\chi^2(8)=372.05, p<1\%$ ）²⁴。つまり、これらはそれぞれ互いに関連性があると言えることになる。手紙文、描出文は、ともに傾向のようなものは見受けられなかった。

図2 対象副詞の地の文・会話文などへの出現傾向



	地の文	手紙文	描出文	会話文	計
おそらく	174	4	36	49	263
たぶん	168	6	52	92	318
さだめし	16	3	6	44	69
きつと	121	8	137	493	759
さぞ	8	4	16	100	128
計	487	25	247	778	1537

は、プラスの残差の出たセル。

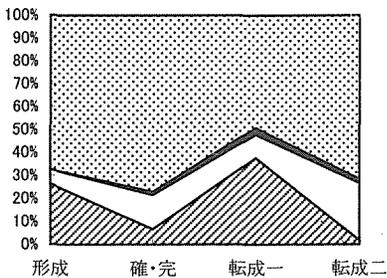
図3は、各対象副詞の地の文や会話文などへの出現比率を時期別に表わしたものである。

図2において地の文に多く見られるという傾向があった「おそらく」と「たぶん」を見ると、「おそらく」では、相対的に見て、転成一期を除いてはどの時期でも地の文への出現が多いことがわかるが、「たぶん」は、形成期の作家では60%以上を占めていた会話文での用例数が徐々に減少し、かわって地の文や描出文での用例が増加していることがわかる。

以上のことより、図2では同じく地の文へ出現する傾向にあるとされた「おそらく」と「たぶん」であるが、「おそらく」は全体的には地の文への出現が多く、時期別でも半数以上が地の文へ出現していたのに対し、「たぶん」は時期が下るに従って地の文へ出現が増加しており、この両語が異なった変遷をしてきたことがわかる。

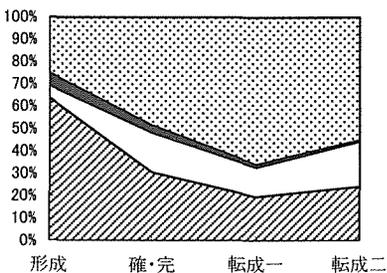
次に、図2において会話文への出現が多いとされた「きつと」と「さぞ」を見てみよう。「きつと」では形成期では80%以上を占めていた会話文での用例が漸次減少していき、転成二期の作家

図3 対象副詞の地の文等における時期別変遷



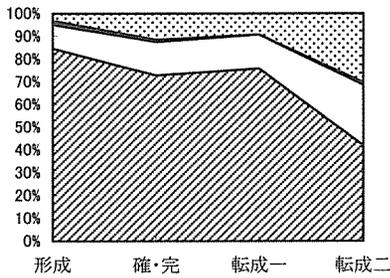
おそらく

	形成	確・完	転成一	転成二	計
地の文	43	57	34	40	174
手紙文	0	1	2	1	4
描出文	4	11	7	14	36
会話文	17	5	26	1	49
計	64	74	69	56	263



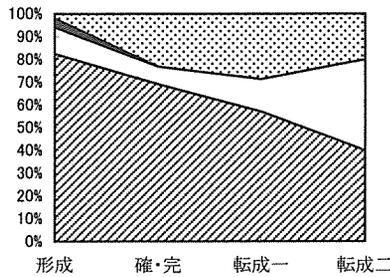
たぶん

	形成	確・完	転成一	転成二	計
地の文	9	30	50	79	168
手紙文	2	2	1	1	6
描出文	2	11	10	29	52
会話文	23	19	15	35	92
計	36	62	76	144	318



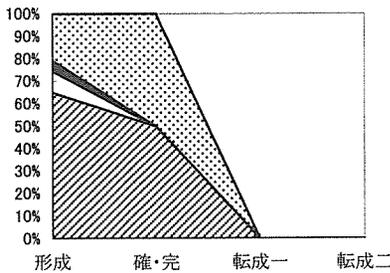
きつと

	形成	確・完	転成一	転成二	計
地の文	5	25	10	81	121
手紙文	3	2	0	3	8
描出文	17	32	16	72	137
会話文	139	159	82	113	493
計	164	218	108	269	759



さぞ

	形成	確・完	転成一	転成二	計
地の文	2	3	2	1	8
手紙文	4	0	0	0	4
描出文	12	1	1	2	16
会話文	85	9	4	2	100
計	103	13	7	5	128



さだめし

	形成	確・完	転成一	転成二	計
地の文	13	3	0	0	16
手紙文	3	0	0	0	3
描出文	6	0	0	0	6
会話文	41	3	0	0	44
計	63	6	0	0	69

では50%をきる程の出現率となっており、かわって地の文や描出文への出現が増加している。特に、地の文への出現比率は時期ごとに増加している。「さぞ」は、形成期以降は用例数が激減しているため、ここでは形成期のみ絞って見てみる。すると、会話文での使用が8割以上を占めていることがわかる。

以上のことより、図2では同じく会話文への出現が多いとされた「きつと」と「さぞ」であるが、このうち特に「きつと」では、形成期以降転成一期までは会話文への出現が多かったが、転成二期では出現比率が急激に下がる結果が見られた。

なお、形成期を除くと用例数が激減する点で「さぞ」と同じような出現傾向を見せた「さだめし」であるが、形成期での比率を「さぞ」と比較してみると、「さだめし」は「さぞ」より地の文での出現比率が高く、逆に会話文への出現比率は低くなっていることがわかる。この点で「さだめし」と「さぞ」は対照的とも言える傾向を見せている。

以上見たように、それぞれの対象副詞は通時的に不変な出現傾向を示すのではなく、時期的な変動があることがわかった。

5. 共起形式別の分析

本稿で対象とする「推量のモダリティ副詞」の用例の中で、推量以外のモダリティ形式とも共起する用例が多く見られた。以下、対象副詞はどのような形式と共起し、そこにどのような傾向が認められるのか、を見ていくことにする。

今回の調査で、全対象副詞の共起形式としては以下のものがあつた。各対象副詞において2例以上見られたものを列挙する。

推量：(ダ) ロウ²⁵、マイ、ト思ウ²⁶、推量該当表現²⁷

判断：カモシレナイ²⁸、ニ違イナイ²⁹、ニ決ッテイル、(ノ) デハナイカ³⁰、ハズ (ダ)、ヨウ (ダ)、ラシイ

疑念：カ³¹

断定：(ノ) ダ³²、テヨ³³、ゼロ形式 (用言の活用形)

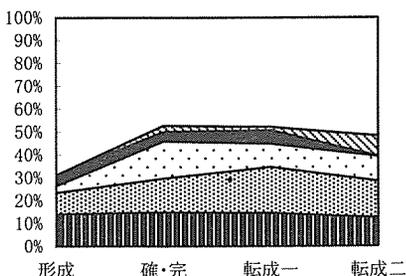
なお、推量や判断といった範疇は、益岡(1991)、三宅(1994)、安達(1997)、仁田(2000)、森山(2000)などでの分類を参考に各形式を下位類化したものである³⁴。先行研究では、推量と判断を同じ範疇の下位類として設定し、また判断も詳細に区分している³⁵が、調査の結果ではカモシレナイとニ違イナイ以外の判断のモダリティ形式の出現は多くはなかつたので、本稿では判断として分類した。なお、以下、推量や判断といった範疇を「共起成分」と呼ぶ³⁶。

さて、上記の形式のうち、(ダ) ロウ、マイ、ト思ウ/カモシレナイ、ニ違イナイ/(ノ) ダ、ゼロ形式の七つの形式は、「おそらく」では全体の85.93%、「たぶん」では87.11%、「さだめし」では91.30%、「きっと」では95.39%、「さぞ」では94.53%と、各対象副詞の共起形式の大半を占めていた。本稿では、この七つの形式を代表的モダリティ形式と見なし、以下これらの形式に関して分析を進めていくことにする³⁷。

まず、各対象副詞別に、上記七つの形式との共起関係の変遷について見る (図4)。

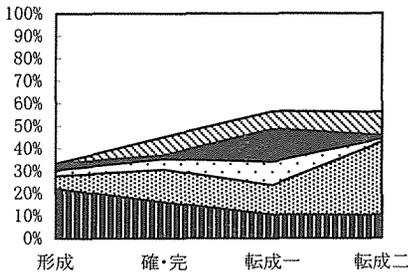
「おそらく」や「たぶん」においては、形成期では共起形式として(ダ) ロウ・マイが7割弱程度占めていたのに対し、時期が下るにつれて(ノ) ダのような断定のモダリティ形式やニ違イナイのような判断のモダリティ形式、およびト思ウのような他の推量のモダリティ形式とも共起した用例の比率が高くなっていることがわかる。時期により使用された共起形式には異同があるが、少なくとも「おそらく」「たぶん」においては、形成期以降、多岐に渡る共起形式が累加するよう

図4 対象副詞の共起形式の時期別変遷



おそらく

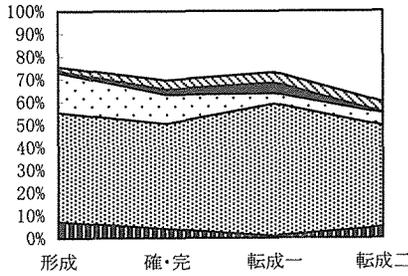
	形成	確・完	転成一	転成二	計
ダロウ・マイ	44	35	33	29	141
ト思ウ	0	2	1	5	8
カモシレナイ	3	3	4	0	10
ニ違イナイ	2	12	7	6	27
ダ・活用形	6	11	14	9	40
その他	9	11	10	7	37
計	64	74	69	56	263



- ダロウ・マイ
- ▨ ト思ウ
- ▩ カモシレナイ
- ニ違イナイ
- ▧ ダ・活用形
- その他

たぶん

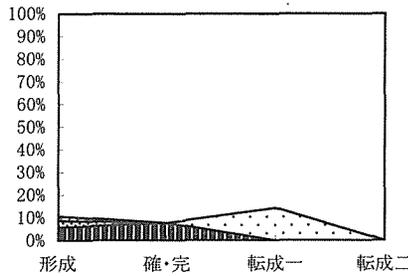
	形成	確・完	転成一	転成二	計
ダロウ・マイ	24	34	33	63	154
ト思ウ	0	5	6	15	26
カモシレナイ	1	1	11	2	15
ニ違イナイ	1	3	8	2	14
ダ・活用形	2	9	10	47	68
その他	8	10	8	15	41
計	36	62	76	144	318



- ダロウ・マイ
- ▨ ト思ウ
- ▩ カモシレナイ
- ニ違イナイ
- ▧ ダ・活用形
- その他

きっと

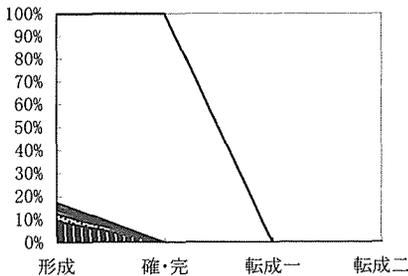
	形成	確・完	転成一	転成二	計
ダロウ・マイ	40	66	29	108	243
ト思ウ	3	9	5	12	29
カモシレナイ	1	5	5	1	12
ニ違イナイ	29	28	5	15	77
ダ・活用形	79	101	63	120	363
その他	12	9	1	13	35
計	164	218	108	269	759



- ダロウ・マイ
- ▨ ト思ウ
- ▩ カモシレナイ
- ニ違イナイ
- ▧ ダ・活用形
- その他

さぞ

	形成	確・完	転成一	転成二	計
ダロウ・マイ	92	12	6	5	115
ト思ウ	2	0	0	0	2
カモシレナイ	0	0	0	0	0
ニ違イナイ	0	0	1	0	1
ダ・活用形	3	0	0	0	3
その他	6	1	0	0	7
計	103	13	7	5	128



- ダロウ・マイ
- ▨ ト思ウ
- ▩ カモシレナイ
- ニ違イナイ
- ▧ ダ・活用形
- その他

さだめし

	形成	確・完	転成一	転成二	計
ダロウ・マイ	52	6	0	0	58
ト思ウ	1	0	0	0	1
カモシレナイ	1	0	0	0	1
ニ違イナイ	1	0	0	0	1
ダ・活用形	2	0	0	0	2
その他	6	0	0	0	6
計	63	6	0	0	69

になり、それに伴い相対的に（ダ）ロウなどの共起形式の比率が減少したと考えられる。

次に、「きっと」を見ると、形成期から転成二期まで時期により若干比率の増減は見られるものの、各共起形式の比率の変動幅はそれほど変化を見せていない。あえて特徴を挙げるならば、ニ違イナイの減少ということであろうか。形成期では17%程度を占めていたが、転成一期以降では5%前後になっている。しかし、これ以外に極端な変化は見受けられない。このような傾向は「お

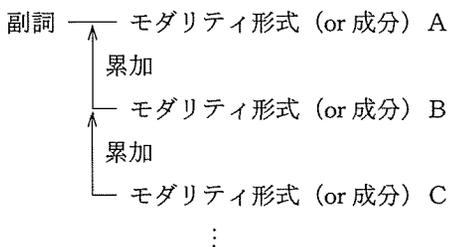
そらく」や「たぶん」が時期と共にその共起形式にも変化が見られたのとは対照的である。そしてこのことは、「きっと」とそれと共起する一定量の共起形式との関係が、明治期以降では安定しているかのようにも見える。

最後に、「さぞ」と「さだめし」だが、この2語は確立・完成期以降、用例数自体が激減してしまったので、形成期に絞って特徴を見ることにする。特徴としては、(ダ)ロウという一つのモダリティ形式³⁸が「さだめし」で80%強、「さぞ」で90%弱を占めていることである。これは、「おそらく」や「たぶん」「きっと」のある一時期だけ取り出してみても、一つの共起形式だけがそれほどの占有率を占めている時期がないのとは対照的である。逆に言えばそれだけ、当時の作家からすれば「さぞ」「さだめし」と(ダ)ロウの関係は強く結びついていたものだったのかもしれない。

さて、以上のことから、各対象副詞は大きく三つのタイプに分けることができると考えられる。すなわち、1:「おそらく」「たぶん」のタイプ、2:「きっと」のタイプ、3:「さぞ」「さだめし」のタイプである。

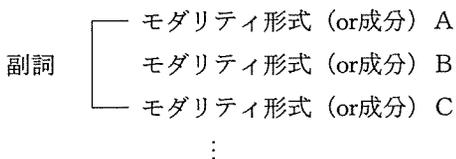
1のタイプは、形成期に生まれた作家において、ある一つの共起形式の占める割合が高かったが、時期を経るに従って、徐々に他の共起形式の割合が増加していくといったものである。このような、時期の変遷に伴って共起形式が多様化しているタイプの副詞を「共起形式累加型の副詞」と名付けておく。この副詞のタイプは、仮説的にはあるが、以下の共起モデルとして抽象化できよう。

「共起形式累加型」の共起モデル



次に「きっと」に代表されるような2のタイプは、どの共起形式もほぼ一定した割合で出現しているものである。このように、多くのモダリティ形式が共立しているタイプの副詞を「共起形式共立型の副詞」と名付けておく。このタイプの副詞の共起モデルは、以下のように書けよう。

「共起形式共立型」の共起モデル



そして、「さぞ」や「さだめし」などの3のタイプは、ある一つの共起形式が(全時期を通じて)³⁹大部分を占めるものである。これはいわば、副詞と共起形式との関係が固く結びついているとも

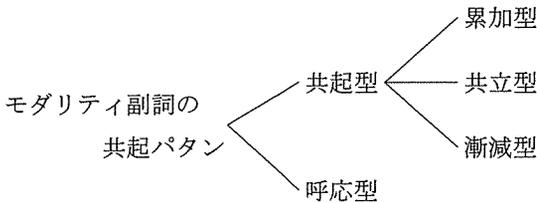
言え、工藤(1982)の言う「呼応」の関係とも見なせる。ゆえに、このタイプの副詞を「共起形式呼応型の副詞」と名付けておく。共起モデルは以下の通りである。

「共起形式呼応型」の共起モデル

副詞 —— モダリティ形式A

以上の考察より、本稿で扱った推量のモダリティ形式と共起するとされる副詞は、以上のような史的変遷の過程を経た副詞と言えるものであり、それぞれの変遷過程は上に提示した共起モデルとして記述できるであろう。

各共起モデル間の関係については、複数の形式と共起するかしないかで累加型・共立型のタイプと呼応型の二つに分けることが可能だと考えられる。また、本稿の分析では該当する副詞はなかったが、理論的には共起形式が時代を経るごとに減っていくパターンも想定できる。これを「共起形式漸減型」と名付けておこう。これらの型の関係は、以下のように図示できる。



「共起型」は副詞と共起形式が一对多の関係であり、「呼応型」はそれが一对一の関係であるという点で、分立される。

では、副詞にこのような共起形式の変化の有無を生じさせた原因は、何であるのだろうか。

筆者は、「2. 対象副詞」において「モダリティ」および「推量」を定義した。ここで、「推量のモダリティ」として定義付けを行なうと、概略「言表事態の実現する可能性が100%ではないという、話し手の主観的な判断・態度を表わすカテゴリー」となる。そして、この推量のモダリティが、副詞の語彙的意味に「やきつけられて」(工藤2000:210)いる場合、推量のモダリティ形式は必ずしも具現化される必要はなくなり、逆に「やきつけられて」いない場合には共起形式は必ず具現化される必要があると想定できる。

具体的には、「おそらく」や「たぶん」の語彙的意味に推量のモダリティがやきつけられているとすると、あえて(ダ)ロウなどの推量のモダリティ形式を明示的に共起させる必要はなくなる。なぜなら、「おそらく」や「たぶん」に推量のモダリティの意味が存在するわけであるし、それにより単独で用いられても推量の意味を表わしうるからである。そして、それにより、たとえ文自体が推量のモダリティを表わしていなくとも、副詞が共起することによって推量の意味が付与されると考えることができる。たとえば「彼女は喜ぶ。」のように、推量のモダリティを明確には表わしていない文(この場合、断定のモダリティ)に、推量の意味がやきつけられている「おそらく」を共起させて「おそらく彼女は喜ぶ。」とすれば、文末形式はそのままだが文全体のモダリティは推量になると考えられる。

これに対し、「さぞ」や「さだめし」も、推量のモダリティが語彙の意味に存在する副詞と考えられるが、「おそらく」や「たぶん」に比べ、この2語の語彙の意味における推量のモダリティのやきつけられている程度は低いものと考えられる。なぜならば、たとえば「彼女は喜ぶ。」に「さぞ」「さだめし」を共起させた「さぞ／さだめし彼女は喜ぶ。」という文は、座りの悪い文になると思われるからである。座りが悪いということは、文の要素に不備が感じられるということである。この例文の場合、「さぞ／さだめし彼女は喜ぶだろう。」のようにダロウなどの推量のモダリティ形式を共起させると、そのような座りの悪さは解消されるものと思われる。これは、やきつけられた程度が低いことが、副詞自体に推量のモダリティの意味を想定することを困難とし、それゆえ推量のモダリティ形式の具現を必要とするからではないかと考えられる。

なお、本調査の用例で、「さぞ」と「さだめし」が用言の活用形と共起した例は両語の総計197例中5例のみであり、形成期のみ出現した。いずれも修飾節内で用いられている。

1. さぞ焚きつけられて歸つて来る夫を、かうしてちつと待つてはみられないやうな気がした。

(緑の路：58中段)

2. 女ならば、定めし見事な物、綺麗な物、色彩の濃い物に飾られてあると思ひの外、其様な目に着く物は一品も無いので當今の女學生としては變つて居る。(魔風戀風：19上段)

以上のことより、やきつけられた程度の度合いにより、モダリティの意味を想定することが容易な副詞もあれば、困難な副詞もできるものと考えられる。そして、このようなやきつけられた程度の違いは、当該の副詞の使用頻度とも少なからず関わっているものと考えられる。

また、これと関連して、当該の副詞が一語のみで使用できる(以下、「一語文」と呼ぶ)かどうかということも、やきつけられているか否かの判断を下す上での一助になるものと考えられる。副詞が一語文で用いられるということは、その副詞だけでその語彙の意味であるモダリティを伝達できるということである。逆に、単独で用いるのが不自然であれば、モダリティが語彙の意味にやきつけられていないということになろう。本調査で得られた用例の中で、一語文で使用されている例⁴⁰としては、以下のようなものがあつた⁴¹。

- 3-1. 「あの方から、<カレーの代金を：著者注>お貰いねがえるんですか」「あ……。多分」

(あるぷす大将：137下段)

- 3-2. 「長島はプロ野球に行くの」「たぶんね。(受け月：133)

- 4-1. 「きつと間違ひですわ。きつと。」(第二の接吻：76上段)

- 4-2. 「後で振り返ってみたら、きつと、独特の色に見える、ひとかたまりの。」「きつとね。」

(白川夜船：164)

5. 「お前や實家の事と成ると、一つ一つ難癖をつけてさ、宛然敵同士でもあるやうに！妾は眞實に胸が裂けるやうでしたよ。」「嘸ねえ、ですけれど……」と、眞砂子が何か言はうとすると、～(生さぬ仲：43下段)

このうち、5の「さぞ」の例では、「発話を和らげる」(森本1994：67)機能を持つ終助詞、さらに「軽い詠嘆の気持を含む判断」(国立国語研究所1951：152)を表わす「ね(ねえ)」が共起していることで成り立っていると思われる。終助詞がなければ、「さぞ」は単独では用いられにくい

ではないかと思われる。実際、本調査では、「さぞ」が一語文で用いられた用例は、この一例のみであった。この点、終助詞の有無にかかわらず一語文として用いられる「たぶん」「きっと」とは対照的であると言えよう⁴²。

本稿での対象副詞では、図4より、「おそらく」「たぶん」において、形成期に7割近く共起していた(ダ)ロウが時代を経るに従い他のモダリティ形式と共起するようになってきていることから、この2語はやきつけられた場合の副詞に該当すると言える。これに対し、「さぞ」と「さだめし」はやきつけられていない副詞に該当するものと考えられる⁴³。

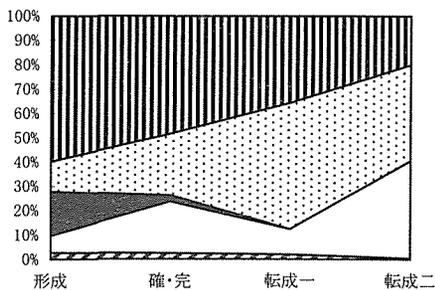
以上のように、副詞に共起形式の変化を生じさせた原因について考えてみたが、この議論は、あくまでも想定域を出ないものであり、その意味で今後のより深い研究を必要とするものである。

6. 変化の過程に関する考察

本稿の終わりに際し、対象副詞の使用の変遷に関する考察を加えておきたい。

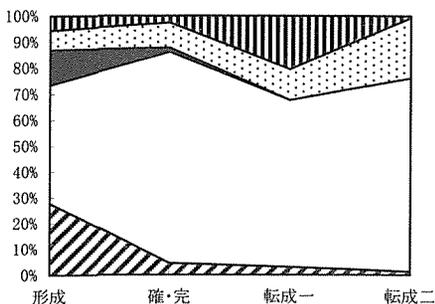
図3において、対象副詞が地の文や会話文への出現にどのような傾向の違いが存在するかを見た。これより、まず形成期の段階においては、会話文に多く出現した対象副詞のグループ—きっと・たぶん・さぞ・さだめし—と地の文に多く出現した「おそらく」に二大別できる。そして、前者のグループのうち、「たぶん」は地の文へ使用されるようになり、「さぞ」「さだめし」は使用されること自体少なくなっていくという傾向が見られた。

図5 地の文/会話文における各対象副詞の時期別変遷



地の文

	形成	確・完	転成一	転成二	計
おそらく	43	57	34	40	174
たぶん	9	30	50	79	168
さだめし	13	3	0	0	16
きっと	5	25	10	81	121
さぞ	2	3	2	1	8
計	72	118	96	201	487



会話文

	形成	確・完	転成一	転成二	計
おそらく	17	5	26	1	49
たぶん	23	19	15	35	92
さだめし	41	3	0	0	44
きっと	139	159	82	113	493
さぞ	85	9	4	2	100
計	305	195	127	151	778

ここで、二つの疑問が生じる。すなわち、①なぜ「たぶん」は地の文で使用されるようになって

たのか、②「さぞ」「さだめし」はなぜ使用されることが少なくなっていったのか、についてである。以下、この点に関し、4.2節および5章での考察を踏まえつつ、考察を加えてみたい。

①については、形成期の「おそらく」と「たぶん」は、前者は地の文、後者は会話文へという出現傾向の違いはあった(図3)が、それぞれの共起形式を見る(図4)と互いに似たような傾向があることから、「たぶん」を地の文で使用される例が次第に見られるようになっていったものと推測できる。

図5は、地の文および会話文における各対象副詞の時期別の出現比率を表わしたものである。これによると、「たぶん」は、他の対象副詞に比べ、地の文での占有比率が転成一期以降高まったことがわかる。また、会話文での時期別変遷の傾向を見ると、「たぶん」は会話文においても、特に転成二期に至って、増加していることが分かる。

以上を踏まえて、「たぶん」が地の文で使用されるようになった理由を考えてみる。

まず、形成期の時点で、「きっと」は多様な共起形式を有しており(図4)、さらに主に会話文で用いられていた(図3,5)ことがわかる(例6-1~6-6参照)。その点で、「たぶん」が会話文で多く用いられるようになる可能性は弱められたものと推測される。

6-1.『球さんは必定怒つてゐる事があるのでしやう、先日雨の降つた時の……あれを覚えてゐるんでしやう。』(秋裕：177上段)

6-2.銀林、其は屹度夫人の阿母様なんだ。』(濱子：35上段)

6-3.そのうちにはきつとまた、あなたのはうへ何とか云つて来るから……(緑の路：86上段)

6-4.お前は、その萩原とか云ふ、田舎から出た女學生に、必然と約束か何かして居るに違ひ無いんだ……。』(魔風戀風：68上段)

6-5.阿父様はきつと断りにいらしたのかも知れないんですもの。』(五人姉妹：116中段)

6-6.貴嬢のお室へご案内ませうね。屹度房さんはお氣に召してよ。(乳姉妹：145上段)

これに対して、同じ時期、「おそらく」は、(ダ)ロウを中心としたほぼ一つの形式と共起しており(図4)、さらに地の文で多く用いられていた(図3,5)。しかし、「たぶん」が意味的にも構文的にも「おそらく」と類似していたことにより(図4)、競合が起こり、地の文において、「おそらく」に対する「たぶん」の比率が高まっていった(図5)ものと考えられる。

さて、ここまでは本調査の結果より導き出されたものであるが、さらに考察を進めると、今後「たぶん」が「おそらく」を凌駕するであろうということが考えられる。図3および図4を見ると、「おそらく」はどの時期においても比較的近似した用例数なのに対し、「たぶん」は現代に近くなるほど用例数が増えている。また、図5の両図においては、地の文でも会話文でも、現代に近くなるに連れ「たぶん」の占める割合が大きくなっていることが分かる。共起形式にそれほど大きな違いがないことを考え併せると、「たぶん」が「おそらく」を凌駕する蓋然性は高く、今後も注目するに値する副詞であると言えるだろう。

また、「きっと」についても、変化の兆しが伺える。「きっと」は、転成二期において、地の文への出現が増加している(図3,図5)。このことより、第二次大戦後に生まれた作家においては、「きっと」が必ずしも会話文でのみ用いられる副詞ではないという認識が生じてきた可能性が考え

られ、今後も観察すべき副詞と言えよう。

さて、「たぶん」は、「おそらく」を凌駕しうることは述べたが、「きっと」とはどのような関係になるであろうか。「きっと」は、意味的には、「おそらく」や「たぶん」よりも「強い」推量を表わすとされる⁴⁴。それゆえ、相互の入れ替えにより若干のニュアンスの違いが生じる場合もある。このニュアンスの違いが、「たぶん」と「きっと」とをそれぞれ特徴づけるため、現状のままいけば、互いに存立していくものと考えられる。

次に、②の「さぞ」と「さだめし」の使用の減少についてであるが、これも「きっと」が絡んでいるものと考えられる。まず、「きっと」と「さぞ」「さだめし」は、同じく会話文に多く出現した副詞である(図3)。さらにまた、すでに形成期の時点で、「きっと」は多様な共起形式を取りうる副詞であったのに対し、「さぞ」と「さだめし」はダロウを中心とした一対一の対応関係(呼応関係)しか持ちえない副詞と言いうるものであった(図4)。以上のように、出現する文が同じということと共起の制約ということから、「さぞ」と「さだめし」はある特定の文意を表わす場合を除き、使用の幅が制限されていったものと考えられる。ただ、この2語の場合、どうしても用例数の少なさが問題として残るので、このような想定をより確かなものとするには、明治期以前からの流れから考察する必要があるだろう。

以上、対象副詞の使用の変遷について考察を加えたが、本稿のデータの性質上意味的な面からの考察が充分に行なうことができなかった。この点に関しては、稿を改めて考えてみたい。

7. おわりに

本稿は、いわゆるモダリティ副詞、なかでも推量のモダリティ形式と共起するとされる副詞に関して、明治期以降、どのような形式と共起し、移り変わっていったのかを中心に考察した。

その前段階として分析した副詞自体の出現率の変遷については、「きっと」が通時代的に、「さぞ」と「さだめし」は形成期に、「おそらく」「たぶん」は転成期に使用率が高くなっていることがわかった。

また、地の文や会話文などにおける用例出現率に関しては、前者に多く見られた副詞として「おそらく」「たぶん」が、後者に多く見られた副詞には「きっと」があった。地の文での用例が多く見られた「おそらく」と「たぶん」だが、「おそらく」は全時期を通じて地の文への出現が多かったが、「たぶん」は形成期では会話文に多く見受けられていたものが、時期が下るにつれて地の文への出現が増加していったという違いが見られた。また、会話文に多く見られた「きっと」は全時期を通じて会話文に多く用いられていたが、地の文への使用も漸増している。以上のことより、これらの副詞は、「地の文」「会話文」といったある特定の一つに限定されて用いられるのではなく、時期の変遷によって、出現する文に変動が見られることがわかる。また、形成期にのみ用例が多く見受けられた「さぞ」と「さだめし」は、「さぞ」が会話文への出現比率が8割近くで、地の文への出現がほとんどないのに対し、「さだめし」は会話文への出現比率は6割強で、地の文への出現も2割近く見られる点で対照的である。

副詞と共起形式との関係においては、変遷のプロセスとして大きく三つのタイプを抽出するこ

とができた。すなわち、「おそらく」「たぶん」などの「共起形式累加型」,「きっと」の「共起形式共立型」,「さぞ」「さだめし」の「共起形式呼応型」である。そして、その共起のタイプに応じた仮説的な「共起モデル」を提示した。

最後に、今後の課題としていくつか挙げておきたい。まず、本稿は副詞と共起形式とにどのような出現傾向が見受けられるかということについて、特に形式的な変遷に対しての大局的な把握に主眼を置いたものとなってしまった。本研究をより内実の濃いものとするためには、出現傾向の違いをもたらした要因に関するさらなる考察、また作家間の文体的特徴の差異を考慮に入れた考察も当然踏まえなければならない。本稿では、それらに関して多くは触れることはできなかったが、今後、副詞および各モダリティ形式の意味の史的変遷からの研究、および作家の文体的特徴を踏まえた研究を行なう必要があるだろう。

また、本稿で提示したモデルが、他の副詞や文法事象に対して、どの程度拡張できうるかも興味ある対象となろう。今後、推量以外の範疇の副詞を対象とし、また純文学作品や、論説文、発話資料など多角的な資料に基づいて、仮説モデルの妥当性・一般性について考察していきたい。

注

- 1 鈴木(1986:750)に「現代日本語とは、普通明治期以降の日本語をさす」とある。
- 2 本研究の位置づけについて簡単に述べておきたい。言語変化研究におけるアプローチの仕方の一つとして、歴史言語学的なもの和社会言語学的なものがあるように思われる。このうち、日本語を対象とした研究において社会言語学的アプローチを採った研究の場合、その多くは、得られたデータから一般性を抽出しようとしても、その一般性には不十分な感が否めないように感じられる。それは、社会言語学的な先行研究では、得られたデータにどうしても「今現在」という制約が付加されてしまう傾向があるため、「一般性」という概念と食い違いが生じてしまうことに起因していると思われるからである。このことは逆に、社会言語学的な側面からの言語変化研究にも資するような、より一般性の高い理論の構築を目指そうとするならば、史的な変遷についての観察も必要不可欠であるということを示しているとも考えられる。本研究は、このような考えから、社会言語学的な側面からの日本語の言語変化研究にも資するようなより一般性の高い言語変化理論の構築を目指すものであり、本稿はその端緒になればと考えている。
- 3 奥田(1984・85)、三宅(1995,1999)、安達(1999)を参照。なお、森山(1992:73)のように、ダロウの基本的意味を「推量」ではなく、「結論にまだ至っていない—判断を形成する過程にあること—」の表示と捉え、その延長線上で「推量」の意味が生起すると捉えている研究もある。
- 4 各氏の定義における共通点は、推量のある事態や命題に対して「想像」したもの、もしくは「想像」の中で認識・把握したものとして捉えている点にあると言えるだろう。相違点としては、たとえば三宅(1995:85)では「想像の中で命題を真であると認識する」とあるのに対し、仁田(2000:94)は「事態の成立・存在を不確かなものとして、自らの想像・思考や推論の中に捉えたもの」としているなど、命題を真(もしくは確かなもの)と見るか否かに違いが存在しているように見受けられる。
- 5 本稿での「モダリティ」は、仁田(1991)の「真正モダリティ」と「疑似モダリティ」、また益岡(1991)の「一次的モダリティ」と「二次的モダリティ」の両方の概念を含むものである。その意味では、中右(1979,1994)における「モダリティ」の概念よりも広い範囲を設定していることになる。

- 6 いわゆる「ゼロ形式」も含む。
- 7 近藤(1989), 益岡(1991), 野田(1997), 工藤(2000)などでは, 概略「モダリティ」を「機能的なカテゴリー」として設定し, これに対する形態的なカテゴリーとして「ムード」を設定している。その意味においては, 本稿の「モダリティ形式」は「ムード」とも呼ぶうるものである。しかし, 「ムード」の概念に関する設定には各先行研究に異同が見受けられる(たとえば, 益岡1991では動詞類に屈折体系を持つ言語に対してのみ有効な概念としているのに対し, 近藤1989や工藤2000では動詞に帰結させた概念とし, また野田1997はモダリティを「実現する文法形式」として他の三氏よりも広義に設定している)ため, 本稿では「モダリティ形式」と呼ぶことにする。
- 8 「きっと」は, 主体の違いによって決意・要望・推量などと意味が変わる場合がある(飛田・浅田1994)が, ここでは推量の意味と思われる用例もしくは推量の意味でも読みとれると思われる用例を取り上げた。
- 9 「おそらくは」も含む。
- 10 「さぞや・さぞかし」も含む。
- 11 「さだめて」も含む。
- 12 工藤(2000)では, 「叙法副詞代表例一覧」として「認識的な叙法」中の「基本叙法 推測」として, 「きっと」を除く本稿での4語と「大方」の計5語を1グループとしてまとめている。また小林(1980)は「さだめし」を除く本稿での4語と「大方」の計5語を対象に分析・考察を行なっている。本調査でも, 当初「おおかた」も対象副詞に設定していたが, 用例数が少なく, またほとんどが量的な程度を表わす用例であったため除外した。
- 13 これらの副詞には, それぞれ意味の違いが見受けられ, それに関する研究もある(小林1980など)が, 本稿では「推量的な意味合いを持ち, かつ推量のモダリティ形式と共起する」という点に注目し, この5語を対象副詞とした。また, 「もしかしたら」「ひょっとして」などの副詞も, 推量の意味合いを持つ場合があるが, 織田(1970)の調査結果によると, これらの副詞は本稿での対象副詞よりは「低度の確信表現語」であるため, 本稿の分析からは除外した。これらの副詞に対する分析は, 別稿に譲る。
- 14 文学史的に見ると, 「大衆文学」という概念自体は大正中期頃の成立で, 当初は時代小説のみが大衆文学と見なされていた(鈴木1997)が, のち通俗小説も主流と見なされるようになった(尾崎1986)。
- 15 純文学と大衆文学の関係は, 純文学は芸術のため, そしてそれを理解してくれるであろう知識層のための文学であった(浅井1978a, 森本1985, 鈴木1997)のに対し, 大衆文学は芸術性は問題にせず, あくまでも庶民のために形成されていった文学であった(浅井1978a, 福田1985, 鈴木1997)とすることができるだろう。その意味で, 両文学の言語表現自体にも何らかの違いが存在するかもしれないと考えることは妥当であろうし, 逆に両者間の言語表現自体を安易に同レベルのものと見なし, 同類のものとして無批判に取り上げることには, 問題があるように思われる。
- しかし, 時代を経るに従って上述の純文学と大衆文学の区分が不明瞭になってきている(福田1985, 鈴木1997)のが現状であり, そのため特に第二次大戦後の資料に関しては大衆文学的ではないものも含まれている場合があることを, お断りしておく。
- また新聞小説やベストセラーは, 尾崎(1984)で指摘されているように, 「大衆性」を内包していると考えられることから, 本調査では新聞小説やベストセラーを大衆文学作品に準じるものとして取り上げた。また, この理由により, 純文学作品に授与される芥川賞受賞作品でもベストセラーになった作品ならば含めた場合もある。

- 16 ここでの大衆文学と純文学の資料性に関する比較はあくまでも筆者の想定であって、確認されたものではない。純文学作品や他のジャンルの大衆文学作品との比較に関しては、稿を改めて考察したい。
- 17 大衆文学が、発表時の時代背景および言語状況を写したものと考えるならば、作品の発表年別で集計する方法も可能であろう。しかし、発表時の言語状況を写すと想定した場合、語彙的な側面（たとえば流行語や新語の導入など）は比較的反映されやすいと思われるが、本稿で対象としているような、副詞とその共起形式の関係を見ようとする場合には、発表時における言語状況の影響はそれほど受けないのではないかと考えられたため、本稿では発表年別での分析法は取らなかった。
- 18 東日本と西日本の境界の設定は、平山ほか編(1992)を参考に、新潟・長野・静岡各県の西境以東の都道県を東日本と、以西の府県を西日本とした。
- 19 χ^2 検定では、用例数が0の箇所がある場合には適用できないという制約がある（田中1996：54）。生年別で分類した場合の転成一期および転成二期において、「さだめし」の用例数は0であり、この制約を受けることから、比較を可能にするためにここでの成育地別の検定においては「さだめし」は除外した。ちなみに、「さだめし」を含めた場合の成育地別の検定結果は、 $\chi^2(8)=27.71$ ($p<1\%$)と有意差が見られ、クラメールのV係数は0.10であった。
- 20 副詞と成育地、もしくは副詞と四つのグループの関係性の強さを表わす数値で、0から1の間をとる。この値が大きいくほど、関係が強いことを表わす。
- 21 図1および後出の図2における「プラスの残差の出たセル」とは、当該のセルの数値がその行において統計的に有意 ($p<1\%$) に多いことを意味する。
- 22 図1は、あくまでも本稿で対象とした五つの副詞に関する使用の変遷を表わしたものである。他の推量の副詞（たとえば、「おおかた」や「ひよっとして」など）に関しては、注12および注13で述べた理由により、図1には含まれていない。
- 23 「描出文」は、山田(1957)の「代行描写話法」や工藤(1993)の「描出話法」に関する論考を参考に設定した。本稿での「描出文」とは、「」や『』などの、発話文や心中思惟文を表わすと考えられる標識がないにもかかわらず、地の文中においてあたかも発話や心中思惟をしているような、感情的要素に富む文のことを指す。これは、地の文と発話文の中間に位置づけうるものである。
デパートにも眼鏡の売場がある。そこなら検眼するにもきつと専門家がいるだろう。そう決めると足を早めた。(恍惚の人：196)
- 24 「集計表の中に期待度数5以下のセルが全セル数の20%以上ある」（田中1996：54）場合、 χ^2 検定の制約に抵触する。「手紙文」は、総計25例で、五つの対象副詞における期待度数は5になり、かつ全セル数の25%を占めるので、 χ^2 検定は使えない。そこで、ここでは「手紙文」を除外して検定を行なった。
- 25 (ダ) ロウには、「(ダ・デア・ア) ラウ」「(デ) セウ」「デショウ・デシヤウ」「マシヤウ」「デシヨ」「ヨウ」などを含む。なお、ここでの「ヨウ」は、「嗚ぞ無情漢と思つてもゐよう、～」（無花果：442上段）、「然う言うたら、お前がたは定めし意氣地が無いと呆れもしようが、～」（五人姉妹：163上段）などである。
- 26 「ト思フ」「コト思フ・思フ」も含む。「ト思ウ」をモダリティ形式として扱う立場については、中右(1979)、仁田(1991)を参照。「ト思ッテイル」などは該当しない。
- 27 推量該当表現には、明治期の小説の手紙文において見られた「ベシ」や「ラン」などを含む。
- 28 「カモシレヌ・マセン」「カシレナイ・マセン」「カモシレネエ」なども含む。また「カモシレナ

- カット」も含む。
- 29 「二相違ナイ」「二違ヒナイ・アリマセン」などを含む。また、「二違ヒアルマイ」「二相違アルマイ」「二違イ(ヒ)ナカット」も含めた。
- 30 「(ノ)デハナイデショウカ」「(ノ)デハアリマセンカ」「ノデハアルマイカ」「ジャンイカ」「ナンジャンイ」(例:「多分、そうなんじゃない。」;なんとなくクリスタル:55)なども含む。なお、安達(1999)には、「ノデハナイカ」と「デハナイカ」の相違に関する言及が見られるが、本調査の結果では、意味的に「推量」を表わすものばかりと考えられたため、この二つの共起形式を一つにまとめた。
- 31 安達(1995)における「疑問の埋め込み節を導く用法」に該当すると思われるものである。
多分今日あたりは歸京するかと思つてゐると、～(濱子:49上段)
- 32 「(ノ)デス・デアル」「(ノ)ダッタ・デアッタ」,「ノデゴザイマス」,「(ノ)ヨ」「(ノ)ネ」,また名詞のみのものも含めた。名詞のみの出現を「名詞+ダ」ととらえる根拠については、野田(1997),愛原(1999)を参照。また、(ノ)ダに関しては詳細な先行研究があり、一概に「断定」の意味だけしかないとは言えないが、本稿では推量のモダリティ形式に主眼をおいたため、このように設定した。
- 33 「テヨ」は、「主張」の意味の場合(長谷川1979)と「依頼・願望」の意味の場合があるが、ここでは前者の場合を指す。たとえば、「私よりもきつと貴女の方がお若く見えてよ。」(乳姉妹:184上段)など。
- 34 各範疇の定義をしておく。「推量」は2章で述べた通りである。「判断」は、「ある事柄や命題(言表事態)の実現・成立・存在する可能性・蓋然性が、判断基準となるものを踏まえた結果、100%ではないと想像において認識・把握したもの」とする。これは、三宅(1995)の「認識的モダリティ」における「実証的判断」「可能性判断」「確信的判断」、また仁田(2000)の「蓋然性判断」「徴候性判断」などに該当するものである。
「疑念」は、「ある事柄や命題(言表事態)の実現・成立・存在する可能性・蓋然性が成立するかどうか不確定のものとして、想像において認識・把握したもの」とする。そして「断定」は、「ある事柄や命題(言表事態)の実現・成立・存在する可能性・蓋然性が100%であると、想像において認識・把握したもの」とする。
- 35 たとえば仁田(2000)では、認識のモダリティの下位層として、<判定のモダリティー判定-概言>を設定し、その「概言」の下位類として「推量(ダロウ、マイ)」「蓋然性判断」「徴候性判断(ヨウダ、ラシイ、ミタイダなど)」を立て、さらに「蓋然性判断」の下位類として「可能性把握(カモシレナイなど)」と「必然性把握(ニチガイナイなど)」を立てている。
- 36 本稿は、副詞と共起形式の関係について考察するものであり、文自体のモダリティまでもその分析対象とするものではない。たとえば、「たぶん明日は雨だ。」という文において、文全体のモダリティは「たぶん」の共起によって「推量」になるが、文の形式自体は「(雨)だ」といういわゆる断定のモダリティ形式に分類されうる。本稿は、あくまでこの「たぶん」と「だ」の関係を見ようとするものである。
- 37 モダリティ形式の通時的な考察については、田中(1981,2001),鈴木(1995)を参照。
- 38 「さぞ」「さだめし」では、マイと共起した用例は見られなかった。
- 39 本稿での「さぞ」と「さだめし」は形成期のみしか分析対象とはできなかったが、理論上は形成期以降の各時期を通じて一つの形式のみしか共起しない副詞も想定できると思われるので、括弧を付した。

- 40 「言いさし」は含んでいない。「言いさし」は、たとえば「お客さんは、一人かい?」「はあ、たぶん……」(風ふたたび:115)のように、「……」などの記号が副詞に後出している場合を設定した。
- 41 「おそらく」「さだめし」では、用例が見られなかった。
- 42 3-2や 4-2も、「ね」が共起しているが、この場合は「軽い詠嘆」というよりは「軽い主張」(国立国語研究所1951:152)に近いものと思われる。
- 43 「きっと」に関しては、推量の意味の他に、決意や要望といった意味もある(注8参照)ことから、一義的に推量がやきつけられていると見なすわけにはいかない。それゆえ、ここでは保留しておく。
- 44 森田(1989:374)では、「おそらく」と「たぶん」は、『きっと』に比べて弱い推量」を表わすとし、さらに「きっと」は、「推量よりは断定に近」く、「他者に対する推量的断定」を表わすとしている。

資料一覧

以下のリストは順にく作家名、生(没)年、作品名、初版出版年;テキスト、テキスト出版年、テキスト出版社;概算文字数>を表す。

形成期の作家(12名):約2,392,543字

- 小杉天外(1865-1952)「魔風戀風」1903;『明治大正文學全集 第十六卷 小杉天外』1930, 春陽堂; 311,480/●尾崎紅葉(1867-1903)「金色夜叉」1898, 春陽堂;『精選名著復刻全集 金色夜叉』(前編1898・中編1899・後編1900・續編1902・續々編1903)1979, 日本近代文学館;271,203/●徳富蘆花(1868-1927)「不如帰」1898;『明治大正文學全集 第十三卷 徳富蘆花』1930, 春陽堂;143,520/●木下尚江(1869-1937)「良人の自白 上篇」1904;『明治文學全集45 木下尚江集』1977, 筑摩書房;177,408/●菊池幽芳(1870-1947)「乳姉妹」1903,『明治家庭小説集』1969, 筑摩書房;272,384/●小栗風葉(1875-1926)「緑の路」1925;『現代日本文學全集 第五十五篇 小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』1931, 改造社;147,420/●田口掬汀(1875-1943)「女夫波」1904,『明治家庭小説集』1969, 筑摩書房;222,208/●沖野岩三郎(1876-1956)「宿命 前篇 恋愛観」1918;『近代日本キリスト教文学全集 5』1975, 教文館;117,520/●柳川春葉(1877-1918)「錦木」1901;『明治文學全集22 硯友社文學集』1969, 筑摩書房;61,824/「秋袷」1902;『明治文學全集22 硯友社文學集』1969, 筑摩書房;26,880/「生さぬ仲 前篇」1912;『明治大正文學全集 第19卷 柳川春葉 佐藤紅緑』, 1929, 春陽堂;120,120/「五人姉妹」1915;『現代日本文學全集 第五十五篇 小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』1931, 改造社;140,616/●中村春雨(1877-1941)「無花果」1901;『現代日本文學全集 第三十四篇 歴史・家庭小説集』1928, 改造社;133,560/●大倉桃郎(1879-1944)「琵琶歌」1905,『明治家庭小説集』1969, 筑摩書房;94,080/●草村北星(1879-1950)「濱子」1902,『明治家庭小説集』1969, 筑摩書房;152,320

確立・完成期の作家(13名):約2,848,269字

- 菊池 寛(1888-1948)「第二の接吻」1925;『菊池寛全集 第七卷 長篇小説集三』1994, 文藝春秋;162,656/「東京行進曲」1928;『菊池寛全集 第八卷 長篇小説集四』1994, 文藝春秋;184,314/●久米正雄(1891-1952)「空華」1922;『現代小説全集 第五卷』1926, 新潮社;144,000/「破船 前篇」1922;『現代日本文學全集 第三十二篇 近松秋江集・久米正雄集』1928, 改造社;173,880/●吉川英治(浜帆一)(1892-1962)「かんかん虫は唄う」1930;『吉川英治全集 10』1983, 講談社;

131,600/「あるぷす大将」1933;『吉川英治全集 10』1983, 講談社;190,568/●尾崎士郎(1898-1964)「人生劇場」1933;『日本現代文學全集72 尾崎士郎・坪田譲治集』1962, 講談社;287,100/●石坂洋次郎(1900-86)『石中先生行状記』1949, 新潮社, 初版本;231,880/●林芙美子(1903-51)『放浪記』1930, 改造社;『精選名著復刻全集 放浪記』1976, 日本近代文学館;155,316/●舟橋聖一(1904-76)「雪夫人絵図」1950;『新選 現代日本文學全集14 舟橋聖一集』1958, 筑摩書房;230,433/●幸田 文(1904-90)『おとうと』1957, 中央公論社, 5版1957.11.25(初版1957.9.27);164,475/●永井龍男(1904-90)「風ふたたび」1951;『永井龍男全集 第5巻』1981, 講談社;167,328/●平林たい子(1905-72)「地底の歌」1948;『新選 現代日本文學全集18 平林たい子集』1959, 筑摩書房;117,327/●石川達三(1905-85)「四十八歳の抵抗」1956;『昭和国民文学全集27 石川達三集』1979, 筑摩書房;218,504/●大岡昇平(1909-88)「武蔵野夫人」1950;『日本文學全集64 大岡昇平集』1962, 新潮社;146,616/●織田作之助(1913-47)「土曜夫人」1946;『定本 織田作之助全集 第七巻』1971, 文泉堂書店;142,272

第一転成期の作家(10名):約2,446,530字

●立原正秋(1926-80)「白い罌粟」1965;『立原正秋全集 第三巻』1983, 角川書店;81,900/●北杜夫(1927-)「奇病連盟」1966;『北杜夫全集 7』1977, 新潮社;200,278/『さびしい王様』1969, 新潮社, 初版本;348,480/●向田邦子(1929-81)「思い出トランプ」1980;『向田邦子全集 第三巻』1987, 文藝春秋;139,104/●有吉佐和子(1931-84)『恍惚の人』1972, 新潮社, 初版本;266,600/●五木寛之(1932-)「蒼ざめた馬を見よ」1967;『昭和文学全集 第26巻』1988, 小学館;53,460/『青春の門 第二部 自立篇上』1971, 講談社, 初版本;208,170/『旅の幻燈』1986, 講談社, 初版本;224,010/●渡辺淳一(1933-)『うたかた 上』1990, 講談社, 初版本;205,884/『失楽園 上』1997, 講談社, 初版本;231,420/●池田満寿夫(1934-97)『エーゲ海に捧ぐ』1977, 角川書店, 3版1977.6.20(初版1977.4.30);108,300/●柴田 翔(1935-)『立ち盡す明日』1971, 新潮社, 初版本;122,976/●安部譲二(1937-)『塀の中のプレイ・ボール』1987, 講談社, 初版本;129,948/●吉行理恵(1939-)『小さな貴婦人』1981, 新潮社, 初版本;126,000

第二転成期の作家(16名):約2,806,443字

●高橋克彦(1947-)『緋い記憶』1991, 文藝春秋, 初版本;213,624/●ねじめ正一(1948-)『高円寺 純情商店街』1989, 新潮社, 初版本;144,609/●連城三紀彦(1948-)『恋文』1984, 新潮社, 初版本;148,608/●藤堂志津子(1949-)『熟れてゆく夏』1988, 文藝春秋, 初版本;127,194/●伊集院静(1950-)『受け月』1992, 文藝春秋, 初版本;183,438/●海老沢泰久(1950-)『帰郷』1994, 文藝春秋, 初版本;181,116/●浅田次郎(1951-)『鉄道員』1997, 集英社, 初版本;197,316/●村上 龍(1952-)『限りなく透明に近いブルー』1976, 講談社, 初版本;96,876/●林真理子(1954-)『最終便に間に合えば』1985, 文藝春秋, 初版本;144,942/●身延典子(1955-)『もう頬づえはつかない』1978, 講談社, 初版本;88,312/●田中康夫(1956-)『なんとなく、クリスタル』1981, 河出書房新社, 23版1981.2.26(初版1981.1.20);64,610/●中沢けい(1959-)『海を感じる時』1978, 講談社, 初版本;57,216/●篠田節子(1960-)『わたしのジハード』1997, 集英社, 初版本;381,840/●山本文緒(1962-)『プラナリア』2000, 文藝春秋, 初版本;178,364/●重松 清(1963-)『ビタミンF』2000, 新潮社, 初版本;208,206/●吉本ばなな(1964-)『哀しい予感』1988, 角川書店;再版1988.12.20(初版1988.12.15);104,720/『白河夜船』1989, 福武書店, 初版本;108,654/『アムリタ 上』1994, 福武書店, 初版本;176,640

参考文献

- 愛原 豊 (1999) 『日本語の機能構造』 くろしお出版
- 浅井 清 (1978a) 「大衆文学の端緒」 市古貞次・三好行雄編 『日本文学全史 5 近代』 pp.135-150, 学燈社
- 浅井 清 (1978b) 「大衆文学の成立」 市古貞次・三好行雄編 『日本文学全史 5 近代』 pp.577-593, 学燈社
- 安達 太郎 (1995) 「ノカとカラカ, タメカ, セイカ, テカ」 『日本語類義表現の文法 (下)』 pp.531-535, くろしお出版
- 安達 太郎 (1997) 「副詞が文末形式に与える影響」 『広島女子大学国際文化学部紀要』 新輯第3号, pp.1-11.
- 安達 太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』 くろしお出版
- 奥田 靖雄 (1984・85) 「おしはかり (一) (二)」 『日本語学』 3-12/ 4-2, pp.54-69/pp.48-62, 明治書院
- 尾崎 秀樹 (1978) 「大衆文学の〈現代〉」 市古貞次・三好行雄編 『日本文学全史 6 現代』 pp.375-396, 学燈社
- 尾崎 秀樹 (1984) 「大衆文学の魅力」 『国文学解釈と鑑賞』 49-15, pp.6-12, 至文堂
- 尾崎 秀樹 (1986) 「変貌する大衆文学—大衆文学の論理—」 『國文學』 31-9, pp.36-41, 学燈社
- 織田 揮準 (1967) 「評価尺度構成に関する基礎的研究 (1)」 『名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科—』 14, pp.7-42.
- 織田 揮準 (1970) 「日本語の程度量表現用語に関する研究」 『教育心理学研究』 18-3, pp.38-48.
- 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」 『国語研報告71 研究報告集 (3)』 pp.45-92, 秀英出版
- 工藤 浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」 『日本語の文法 3 モダリティ』 pp.161-234, 岩波書店
- 工藤 真由美 (1993) 「小説の地の文のテンポラリティー」 『ことばの科学 6』 pp.19-65, むぎ書房
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』 秀英出版
- 小林 幸江 (1980) 「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」 『日本語学校論集』 7, pp.3-22, 東京外国語大学付属日本語学校 (『国語学論説資料17 第三分冊』 1980 所収)
- 近藤 泰弘 (1989) 「ムード」 『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体 (上)』 pp.226-246, 明治書院
- サカイ, セシル (1997) 『日本の大衆文学』 平凡社
- 塩澤 実信 (1995) 『ベストセラーの光と影』 グリーンアロー出版社
- 島本 基編 (1989) 『日本語学習者のための副詞用例辞典』 凡人社
- 鈴木 貞美 (1997) 「大衆文学の展開」 『時代別日本文学史事典 現代編』 pp.56-65, 東京堂出版
- 鈴木 英夫 (1986) 「現代日本語研究における資料の取り扱いについて」 『松村明教授古希記念国語研究論集』 pp.750-769, 明治書院
- 鈴木 英夫 (1995) 「明治期以降の推量表現の推移—「でしょう」を中心に—」 『築島裕博士古希記念国語学論集』 pp.971-1004, 汲古書院
- 瀬沼 茂樹 (1965) 「大衆文学略史」 『國文學』 10-2, pp.12-17, 24, 学燈社
- 田中 章夫 (1981) 「近代語 (明治)」 『講座日本語学 3 現代文法との史的対照』 pp.161-189, 明治書院
- 田中 章夫 (2001) 『近代日本語の文法と表現』 明治書院

- 田中 敏 (1996) 『実践心理データ解析』新曜社
- 辻村 明 (1981) 『戦後日本の大衆心理』東京大学出版会
- 中右 実 (1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と 林栄一教授選暦記念論文集』pp.223-250, くろしお出版
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店
- 仁田 義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田 義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」『日本語の文法3 モダリティ』pp.79-159, 岩波書店
- 野田 春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 長谷川 泉 (1965) 「大衆文学のジャンル」『國文學』10-2, pp.18-24, 学燈社
- 長谷川 泉・武田 勝彦編 (1977) 『国文学解釈と鑑賞 現代新聞小説事典』42-15, 学燈社
- 長谷川 政次 (1979) 「終助詞「てよ」について」『田邊博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』pp.351-363, 桜楓社
- 浜田 雄介 (1996) 「大衆文学の近代」『岩波講座 日本文学史13・二〇世紀の文学2』pp.153-187, 岩波書店
- 飛田 良文・浅田 秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 平山 輝男ほか編 (1992) 『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院
- 福田 久賀男 (1985) 「大衆文学」『85四訂増補版 文芸用語の基礎知識』(国文学解釈と鑑賞4月臨時増刊号) 50-5, pp.434-435, 至文堂
- 益岡 隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 松村 明 (1998) 「東京語の成立と発展—現代の国語—」『増補 江戸語東京語の研究』pp.86-118, 東京堂出版 (『国文学解釈と鑑賞』19-10, 1954を再録したもの)
- 松村 明編 (1969) 『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 三宅 知宏 (1994) 「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』63-11, pp.20-34.
- 三宅 知宏 (1995) 「「推量」について」, 『国語学』183, pp.1-11.
- 三宅 知宏 (1999) 「モダリティとポライトネス」『月刊言語』28-6, pp.64-69.
- 宮崎 和人 (1992) 「現代日本語の判定文について」『広島修大論集—人文編—』32-2, pp.35-63.
- 森田 良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森本 修 (1985) 「純文学」『85四訂増補版 文芸用語の基礎知識』(国文学解釈と鑑賞4月臨時増刊号) 50-5, pp.328-329, 至文堂
- 森本 順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
- 森山 卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐる」『言語研究』101, pp.64-83.
- 森山 卓郎 (2000) 「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』pp.1-78, 岩波書店
- 柳田 泉・勝本 清一郎・木村 毅・猪野 謙二 (1961) 「明治の大衆文学」『座談会明治文学史』pp.475-527, 岩波書店
- 山田 良治 (1957) 「現代作家と代行描写」『言語生活』9, pp.57-64, 筑摩書房

謝 辞

本稿は、平成12年度新潟大学国語国文学会(平成12年11月25日)における口頭発表に加筆修正したものである。発表に際し、新潟大学船城俊太郎教授および三ツ井正孝講師(現助教授)より重要

なご意見およびご指摘を賜った。ここに記して謝意を表す。

(投稿受理日：2001年7月25日)

(改稿受理日：2001年11月15日)

小池 康 (こいけ やすし)

筑波大学文芸・言語学系

305-821 つくば市春日1-250-809

yakoike@lingua.tsukuba.ac.jp

Changes in the relationship between inferential modal adverbs and co-occurrence forms in Modern Japanese

KOIKE Yasushi
Tsukuba University

Keywords

inferential modal adverb, co-occurrence form, modality, co-occurrence model

Abstract

This paper examines changes in the relationship between inferential modal adverbs (IMA)- *osoraku*, *tabun*, *kitto*, *sazo* and *sadameshi* and following forms (we call these “co-occurrence forms”), such as *darō*, *nichigainai*, *kamoshirenai* and the like. First, we survey the process of change after the Meiji period. Then, we present a model of historical change in the relationship between IMA and co-occurrence forms.

When looking at changes in the occurrence ratio of each IMA historically, examples of *kitto* appear in each period. However, many examples of *sazo* and *sadameshi* are seen only in the writing of authors born in early Meiji, and the occurrence of *osoraku* and *tabun* rises in the writing of Showa born authors. And we find that number of occurrences ratio of use in narrative sentences and conversational sentences is different for each IMA: *Osoraku* and *tabun* appear in narrative sentences, and *kitto* and *sazo* in conversational sentences.

The following three types (models) were identified in terms of the relationship between IMA and co-occurrence forms. 1) “Cumulative type”: IMA co-occurring with various co-occurrence forms caused by the turning of the wheel of time. *Osoraku* and *tabun* belong to this type. 2) “Coexistence type”: every co-occurrence form appears regardless of which time period, at almost a fixed rate. *Kitto* is an example of this type. And 3) “Concord -*Kōō*-type”: it co-occurs with only one form. *Sazo* and *sadameshi* correspond to this type.